

研究ノート

『スーダン遺跡紹介』 第7回 クッル (El-Kurru) その2

坂本麻紀 (アラブ調査室研究員)

はじめに

スーダン遺跡紹介の7回目は、前回に引き続きナイル川第4急湍のナパタ (Napata) 地域にあるクシュ王国 (Kingdom of Kush) の王墓地クッル (El-Kurru) を紹介します。ナパタ地域は紀元前8世紀に古代エジプトを支配したクシュ王国の拠点であり、聖なる山ジェベル・バルカル (Jebel Barkal) を中心としたクシュ王国の遺跡 (クッル、ヌリ ; Nuri、サナム ; Sanam、ズマ ; Zuma) が、ユネスコ世界遺産「Gebel Barkal¹ and the Sites of the Napatan Region」¹として登録されています。

今回はクッルに眠る古代エジプト第25王朝 (クシュ朝 ; 714-656 BCE²) のクシュ王たちと、彼らに先行する人々の墓を中心に紹介しましたが、今回は第25王朝に関連する人々の墓から発見された副葬品と、第25王朝の王たちの馬の墓を紹介したいと思います。尚、今回、第25王朝以外のエジプトの年代については、展示図録「大英博物館ミイラ展：古代エジプト6つの物語」 (朝日新聞社, c2021-2022) を参照いたしました。

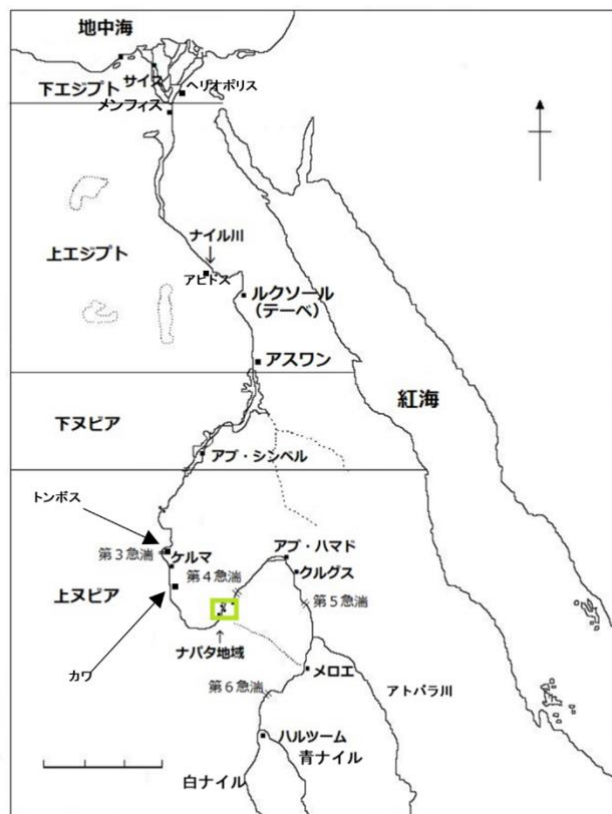


図1 左 エジプト・ヌビア全図
右 ナパタ地域拡大図
(Dunham 1950, Map 1 改編)

1. クッルの副葬品について

第 25 王朝のクシュ王たちの墓地であるクッルは、他の墓地と同様に古代から繰り返し盗掘を受けていました。発掘調査報告書「The Royal Cemeteries of Kush Vol.1: El Kurru」によると、発掘者のライスナー（George Andrew Reisner）によって B 世代（Generation B）とされた人物の墳丘墓 Ku.Tum.2 で胴体部分が失われた遺体が見つっていますが、これ以外の墓からは遺体がほとんど見つかっておらず、骨片が一部見ついているだけとなっています³。また墓に納められた副葬品についても、その多くが盗まれ、破壊されるなどしているため、王や王妃の墓にどのような品がどのくらいの量、納められていたのか全体像を知ることはできません。ただ、盗掘の影響は非常に大きいものの、第 25 王朝の基礎を築いたピアンキ（Piankhy もしくはパイ Piye）をはじめとする第 25 王朝に属する人々の墓からは、エジプトの墓で見られるシャブティ（shabti あるいはシャワブティ shawabti、ウシャブティ ushabti）と呼ばれるあの世で主人に代わって労働を行う人形や、ミイラを作る際に遺体から取り除いた内臓を入れるカノポス壺（canopic jar あるいはカノプス壺）と呼ばれる容器、木製の人型棺の存在を示す青銅製の「目の枠」（図 2）、死者がああの世で食べ物に困らないよう供物の絵などが描かれた供物卓（offering table）、そしてスカラベ（scarab）やウジャトの眼（udjat-eye）といった護符やネックレスなどの装身具、鏡、アラバスター製容器など様々な副葬品が見つっています。これらはピアンキの時期にエジプトの埋葬様式がクシュの墓に取り入れられた、ということを示すものと言えます。



図 2 青銅の目の枠とファイアンスの白目（Ku.62）

※シャバカ（Shabaka）の王妃の墓から出土。
木製の人型棺の目の部分と考えられる。
©Museum of Fine Arts Boston,
（Accession Number 19.2749）

クッルの墓地で見つかった副葬品は、他のクシュの王墓地のものと同じく、スーダンの首都ハルツームにあるスーダン国立博物館（Sudan National Museum）に収められていますが、約 100 年前にこの遺跡を含めクシュの王墓地の発掘調査を行ったアメリカのボストン美術館（The Museum of Fine Arts Boston）も多数収蔵しています。どちらもクッル出土品の常設展示は僅かですが、ボストン美術館ではホームページから収蔵品の検索ができ、クッルだけでなく、他のクシュの墓地から出土した遺物の一部を画像付きで見ることができます。

今回紹介する副葬品は、ボストン美術館で画像が提供されているクッル出土品を中心に、本家のエジプトとは少し違ったエジプト風の護符や、エジプトの中央集権制が崩壊した後の時期にあたる第 3 中間期（Third Intermediate period 1069-656 BCE）のエジプトの埋葬習慣を反映させたカノポス壺など、筆者が興味深いと思った品を少しだけ紹介いたします。

① 有翼女神のアミュレット

アミュレット (amulet) はエジプトの護符の1種で、そのモチーフは神様から動物、昆虫 (スカラベなどが代表的)、眼、心臓、ヒエログリフの形など様々です。また、平面的なもの (薄いもの) から立体的なものまであり、材質も石や金属、ファイアンスなど様々あります。アミュレットは持ち主を災いなどから守護する役割を担っていますが、おおまかに現世用と来世用の2つに分けられると考えられています。特に来世のための護符は、ミイラ (遺体) と関わるもので、ミイラの包帯の中で小さな護符が見つかることも多いです⁴。

図4の翼を持つ女神のアミュレット3点はピアンキの王妃たちの墓から出土したものです。クッルでピアンキの王妃とされる人物の墓は全部で7基ありますが、そのうち被葬者の名前が分かっているのは4基です⁵。エジプトで女神が翼を持った姿で描かれるのは埋葬室の壁画や棺、胸飾りなど限られた場面であり、被葬者や持ち主を守護していると考えられています。代表的なのはツタンカーメン王の金箔張りの第四の厨子や石棺などで、人の姿をしたイシス (Isis)、ネフティス (Nephthys)、ネイト (Neith)、セルケト (Serket) の4人の女神が翼を持った姿で描かれています。ピアンキの王妃たちの有翼女神のアミュレットは、エジプト風に見えますが、女神を特定することはできません。では、どのような特徴が見られるのか具体的に見ていきたいと思います。

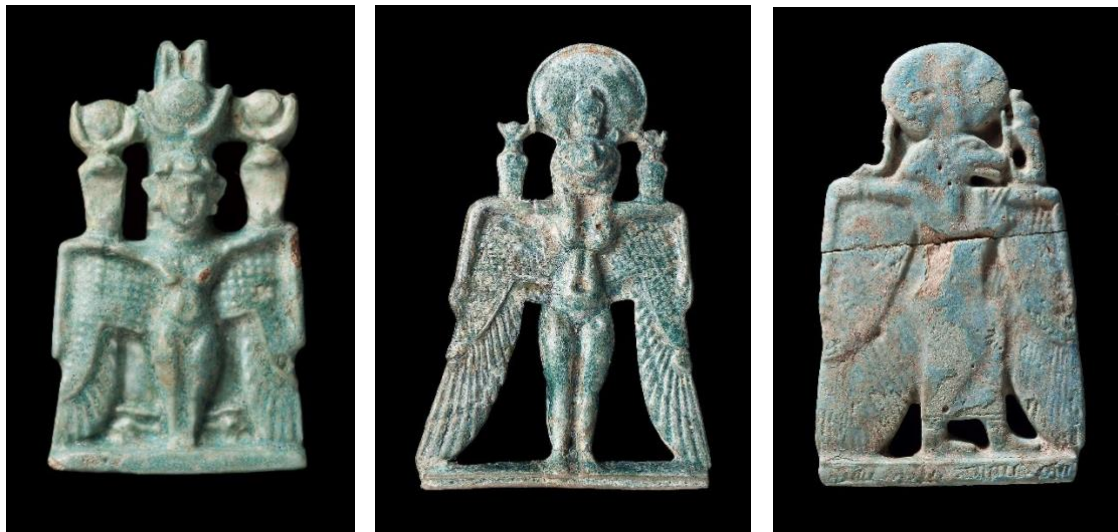


図4 ファイアンス製のアミュレット (左と中央は Ku.53 出土、右は Ku.52 出土)

©Museum of Fine Arts Boston, (Accession Number 24.703, 24.707, 24.668)

図4の左と中央のアミュレットはタビリイ (Tabiry) の墓 Ku.53 のものです。タビリイの墓から出土した花崗岩製のステラによると、タビリイはピアンキの2代前の王アララ (Alara) の娘とされています。図4の左は太陽円盤と角、そして羽が組み合わせられた冠を被った裸の女神で正面を向いています。翼を広げた両腕は肘あたりで直角に下を向き、両肩には太陽円盤と角が組み合わせられた冠を被ったウラエウス (Uraeus) と呼ばれるコブラが載り、両足と翼の間にはウジャトの眼と呼ばれる魔除けの目が描かれるなど盛り沢山です。また、図4中央は太陽円盤とウラエウスが組み合わせられた冠を被ったライオン頭の

裸の女神が正面を向いた姿で表されています。顔と冠が少々違いますが左のアミュレットとほとんど同じ構図で、翼を広げた両腕は肘あたりで直角に下を向き、両肩には太陽円盤と角が組み合わされた冠を被ったウラエウスが載っています。図4の左と中央は、エジプトの様々な図像を組み合わせたクシュ独自のものと言えます。

図4の右のアミュレットはネフルケカシュタ（Nefrukekashta）の墓 Ku.52 の出土品ですが、左側の2つのアミュレットと異なり、顔と胴体、両足は横向き、目と肩は正面、となっています。エジプトの壁画などを見たことがある方はご存じかもしれませんが、エジプトではレリーフや壁画など平面で人物や神々を表す際、顔と胴体、両足は横向き、目と肩は正面を向いて描きます。これらは対象の特徴を全て表すためのルールと考えられています。もちろん小像や彫像などの立体物はこのルールとは異なります。図4の右のアミュレットはエジプトのレリーフや壁画などで見られるルールが適用されていると言えます（肩の上のウラエウスも横向きになっています）。ボストン美術館の資料の説明を参照すると、「ライオンの頭に長髪の鬘を被った女神がシースドレス（sheath dress）を着ている」となっていますが、太陽円盤とウラエウスが組み合わされた冠を被り、翼を広げた両腕は肘あたりで直角に下を向き、肩の上で王冠を被ったウラエウスが立ち上がっている、という構図は、図4の左側の2つのアミュレットとほとんど同じと言えます。非常に面白いのは、エジプトの美術様式を取り入れた図4右のアミュレットが出土した Ku.52 からは、図4左と同じように正面を向いた裸の女神のアミュレット（図5）も出土しているという点です。1つの墓の中にクシュ独自のものがあり、さらにエジプトの美術様式を取り入れ変化したものがある、というのは非常に面白く、色々考えさせられますが、これもクシュ王国の魅力の1つと言えるのではないのでしょうか。



図5 有翼女神のアミュレット
(Ku.52 出土)

©Museum of Fine Arts Boston,
(Accession Number 24.683)

図4と同じような構図のアミュレットや胸飾りは、やはりピアンキの名前不詳の妃の墓 Ku.51 でも見つかっています。クッルの墓は全て盗掘にあっていますが、Ku.51 から Ku.55 のピアンキの妃たちの墓は、ピアンキなど 25 王朝に属する王たちの墓がある場所から北へ 200m ほど離れた場所に造られたこともあり、他の墓に比べるとアミュレットなどの小さな副葬品が多く見つかっています。特にタビリィの墓からは、有翼女神以外にもパタイコス（Pataikos）やベス（Bes）といった男神のアミュレットや胸飾り、ウジャトの眼などのアミュレット、そして有翼スカラベやハトホル（Hathor）女神の胸飾りなど 100 点以上の様々な護符や装身具が出土しています。

図4や図5のようなクシュの有翼女神はこの時期にだけ見られるものです。画像では少々分かりにくいのですが、ピアンキの次のクシュ王で第 25 王朝最初のエジプト王シャバタカ（Shabataka）の名前不詳の妃の墓 Ku.72 から見つかった金製の襟飾り（図6左）に描かれた有翼女神は、エジプトのものと同じような構図になっています。第 25 王朝は

ヌビアのクシュ王がエジプトを支配した時期にあたるため、墓に納められた副葬品などはエジプトで作られたものを持ってきた場合や、ヌビアに連れてこられたエジプトの工人（職人）がヌビアで作った可能性が考えられます。しかし、ヌビアのエジプト支配が終わってから 100 年以上経った紀元前 6 世紀後半のクシュ王アマニナタケレブテ（Amaninatakelepte）の墓 Nu.10 から出土した有翼イシス女神の胸飾り（図 6 右）は、顔にはヌビア人の特徴が表れていますが、それ以外はエジプトのものと変わらない技術の高さがみられます。僅かな期間でヌビアの技術が格段に進歩したことを示すと同時に、ピアンキの王妃たちの墓の副葬品で見られたようなヌビア人の自由で豊かな感性が失われてしまったと言えるかもしれません。



図 6 左：金製の襟飾り（Ku.72 出土）、右：有翼イシス女神の胸飾り（Nu.10 出土）

©Museum of Fine Arts Boston, (Accession Number 21.307, 20.276)

② カノポス壺

ピアンキをはじめとする第 25 王朝に属するクッルの墓の被葬者はミイラ処理が施されたと考えられています。しかし、実際には盗掘によって遺体はほとんど見つかっておらず、埋葬室から見つかった色ガラス片や数人の王妃の墓から見つかった青銅製の「目」の枠（図 2）からミイラを納めたであろう木製の人型棺の存在が推測され、またミイラ制作の際に遺体から取り除かれた内蔵を納めるカノポス壺が副葬品に含まれることや、埋葬室から大量に見つかったビーズからミイラの上に掛けられていたであろうビーズネット（bead net）の存在が推測されるなど、エジプトの墓で見つкаっている様々な出土品や情報と照らし合わせながら、ピアンキの時期からクッルで遺体をミイラにしていた、という推測がなされています。

エジプトの埋葬習慣ではミイラ制作の際に取り出した死者の内蔵はカノポス壺と呼ばれる容器で保管されます。通常カノポス壺は 4 つで 1 セットとなっており、「ホルス息子たち（Sons of Horus）」として知られる四柱の擬人化された精霊⁶を表した 4 つの容器にそれぞれ特定の臓器を入れます。また、容器の外側にはそれぞれの精霊を示す銘文が記されています。エジプトの新国時代（New Kingdom 1550-1069 BCE）の間にカノポス壺の栓（lid）は人頭をかたどっていたもの⁷から「ホルスの息子たち」の精霊の頭部を表すのが一般的

になります。人の頭をしたイムセティ (Imsety) は肝臓、ヒヒの頭をしたハピ (Hapy) は肺、ジャッカル頭をしたドゥアムテフ (Duamutef) は胃、ハヤブサの頭をしたケベフセヌエフ (Qebehsenuef) は腸を守るとされ、通常、死者の心臓はそのまま遺体に残したままミイラにします。ただし、この死者の内蔵をカノポス壺に入れて保管する、というエジプトの埋葬習慣は第3中間期に大きく変化します。遺体から取り除かれた内蔵はカノポス壺に入れず、再び遺体に戻されミイラが作られるようになります。第3中間期のエジプトの墓からは、ミイラなどと一緒にカノポス壺も多く見つっていますが、内蔵を入れた痕跡が確認できない場合だけでなく、容器の内側の空間が浅く内蔵を入れられる構造になっていないものや、栓と容器が一体となっているダミー（外見はカノポス壺に見える）などが見られるようになります。ダミーのカノポス壺は紀元前9世紀くらいに登場し、紀元前750年以降に多く見られるようになったと考えられます⁸。遺体に内蔵を戻すという慣習は、第26王朝（サイス朝 Saite Period ; 664-525 BCE⁹）まで続く¹⁰ようです。

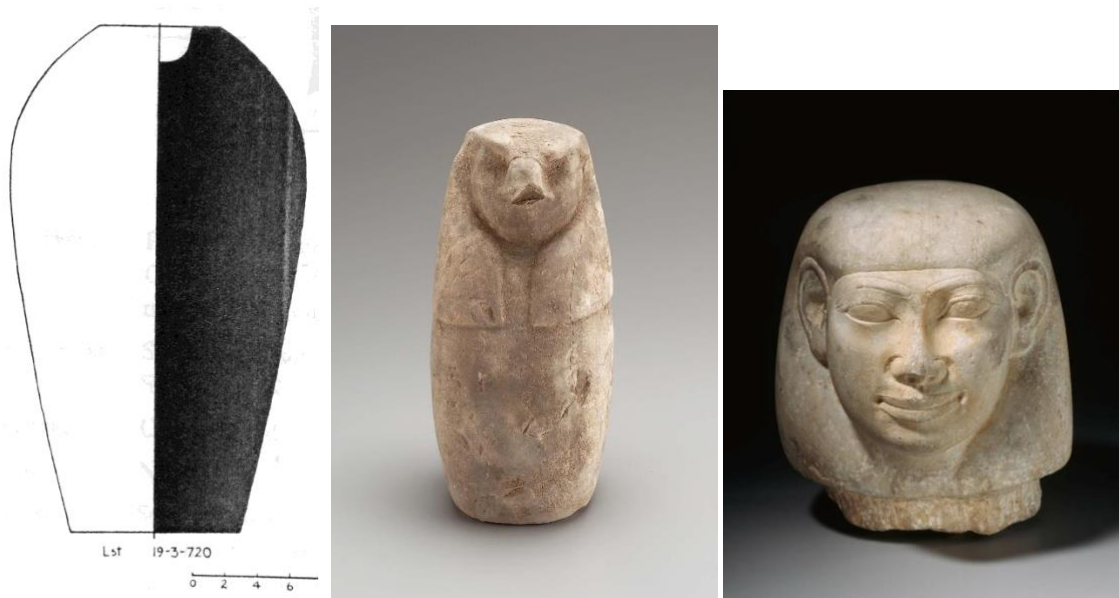


図7 第25王朝の王たちのカノポス壺 左：ピアンキ、中央：シャバタカ、右：タヌタマニ
左 (Dunham 1950, p.66, Fig.22c.) , 中央・右©Museum of Fine Arts Boston, (Accession Number 21.2813, 21.2801)

図7は第25王朝の基礎を築いたピアンキ、第25王朝の最初の王シャバタカ、そして第25王朝最後の王タヌタマニの墓から出土したカノポス壺です。ボストン美術館はピアンキのカノポス壺のイムセティの栓を所蔵していますが、摩耗が酷く画像では見難いため、代わりに発掘調査報告書に記載されている壺の部分の実測図を図7左に載せました。実測図を見慣れていない方のために図の見方を簡単に説明すると、壺の真ん中の線を境に右側が壺の内側、左側が壺の外側（表面）を表しているのですが、右側（内側）で黒く塗られている部分は空間が無いことを示しています（スケールの単位はセンチメートル）。ピアンキのカノポス壺に関しては、壺の内側の空間が栓の部分しかなく、容器としての役割を果たさないダミーであることが分かります。

クッルの墓はかなり酷い盗掘を受けていることもあり、完形ではなく栓の部分しか残っていないカノポス壺も多いのですが、ピアンキの墓からは栓が4点とダミーの壺の部分が2点、そしてシャバタカの墓からはダミーが3点、シャバカの墓からは栓が2点、タヌタマニの墓からは栓が3点と壺の破片が3点（破片は同一個体のもの）出土しています。

図7中央のシャバタカのカノポス壺もピアンキと同じく容器の役割を果たさないダミーとなっています。ピアンキのカノポス壺は栓と壺の部分が分かれています。シャバタカのほうは栓と壺の部分が一体となっており、彫像のように見えます。材質はピアンキもシャバタカも石灰岩が使われています。シャバタカのダミーのカノポス壺と似た型式のものは、エジプトのアビドス（Abydos）やテーベ（Thebes）で見つかっており、材質も石灰岩が多いようです¹¹。

ボストン美術館ではシャバカのカノポス壺の所蔵はないようですが、発掘調査報告書ではアラバスター製のイムセティとハビの栓が見つっていると記載があり、写真も掲載されています（図8）。



B. Ku. 15. Canopic head. C 8770
19-2-676.



c. Ku. 15. Canopic head. C 8768
19-2-677.

図8 シャバカの
カノポス壺の栓
(Dunham 1950, Pl.XXXVII.)

シャバカのカノポス壺の栓は非常に精巧な作りとなっており、ピアンキやシャバタカと作られた年代はそれほど変わらないにもかかわらず、クオリティーに大きな差が見られます。ただ残念ながら壺の部分が見つかっていないため、容器としての機能を果たせたのかどうか分かりません。図7右のタヌタマニのカノポス壺もシャバカのものと異なりますが精巧な作りとなっています。タヌタマニの墓からはカノポス壺の破片が3点見つっていますが、破片に記された銘文から図7右のイムセティの栓の壺の部分であったことが分かっています¹²。ただし、残念ながら内側がどうなっているのか記述がないため容器として使えたのかどうか分かりません。材質はシャバカと同じくアラバスターとなっています。アラバスターという石材は、大理石の一種で、ボストン美術館などでは「トラバーチン Travertine (Egyptian alabaster)」と記載されており、エジプトでしか採れない石材となっています。石灰岩もアラバスターもヌビアでは採れない石材のため、ピアンキ以降の第25王朝の墓で見つかるカノポス壺は、エジプトで作られた完成品をヌビアに持ってきた、もしくはエジプトから石材を持ち込んでヌビアで作ったと考えられます。

ピアンキとシャバタカのカノポス壺は、実際には「壺」ではなく内側の空間を持たない実用性のないダミーとなっています。このようなダミーのカノポス壺の存在から、ピアン

キとシャバタカの遺体は内臓を取り出さずにミイラにしたと考えられますが、第3中間期のエジプトでは内臓を取り出さないミイラが流行っており、カノポス壺もダミーが多く見られます。そのためピアンキやシャバタカは当時のエジプトの流行を取り入れた、と言えるかもしれません。ではシャバカとタヌタマニはどうだったのかと言えば、どちらも壺の内側の空間がどうなっていたのか分かりませんが、エジプト学者で土器の専門家のアストン（David Aston）は、第25王朝のタハルカのカノポス壺（図9）が内側の空間を持っていることから、タハルカの治世にカノポス壺が再びその役割を果たしたのではないかと述べています¹³。ヌリのタハルカの墓（Nu.1）からは、非常に精巧な作りのアラバスター製のカノポス壺が4点見つかっています。

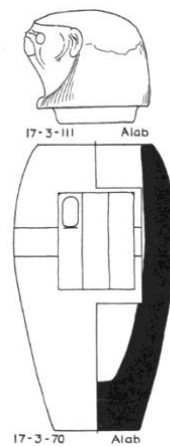


図9 タハルカのカノポス壺

左（Dunham 1955, p.13, Fig.3.）, 右©Museum of Fine Arts Boston, (Accession Number 23.738)

※左と右は別個体。

カノポス壺でもう1つ興味深いのは、王妃たちの墓のものです。クッルではピアンキの王妃2人（ネフルケカシュタ Ku.52, ケンサ Khensa Ku.4）と、タハルカの王妃の1人（ネウペリィ Neupery, Ku.3）の墓からカノポス壺が見つかるのですが、Ku.52 はファイアンス¹⁴、Ku.4 と Ku.3 はアラバスターとなっており、材質が異なります。



図10 第25王朝の王妃たちのカノポス壺 左・中央：ケンサ、右：ネウペリィ

©Museum of Fine Arts Boston, (Accession Number 21.2799, 21.2808, 21.2796)

ピアンキの妃の間で材質が異なるという点も面白いのですが、Ku.4 のケンサは図10右を見ると非常に精巧な作りであることが分かります。ケンサはピアンキの妃ですが、タハルカによって埋葬されたのではないかと考えられており、タハルカの妃であるネウペリィと、墓の場所も隣り同士¹⁵、墓の型式も同じ横穴式の岩窟墓¹⁶、と共通点が多いため、カノポス壺の材質が同じアラバスターであることは納得ができるように思います。ケンサの

墓からは、カノポス壺の栓だけでなく壺の部分も出土しており、内側に空間がある壺であったことが分かっています。ただ、発掘調査報告書によると壺の内側にはプラスターが充填しており、内蔵を入れる容器として使用されていなかったとされています。ネウペリイの墓からはカノポス壺の栓しか見つかっていないため、はっきり分かりませんが、先ほど紹介したタハルカの治世にカノポス壺が再び内蔵を入れる容器となったのではないかと、というアストンの主張とは矛盾するように思われます。

Ku.52 のネフルケカシュタのファイアンス製カノポス壺(図 11)はミニチュアサイズであり、クッルだけでなくヌリでも出土していない珍しいものです。ファイアンスは焼き物の一種で、エジプトだけでなくヌビアでも作られており、それ自体は珍しいものではありませんが、ファイアンス製のカノポス壺は新王国時代のエジプトでは確認できますが、第3中間期では石灰岩かアラバスターが主流であり、ファイアンスのものは確認できません。また、カノポス壺でミニチュアというのも珍しいと言えます。

図 11 ネフルケカシュタのカノポス壺
(Dunham 1950, Pl.XXXVII.)



g. Ku. 52. Faïence miniature C 8845
canopic jars.
19-3-1079, 1130, 1136, 1159.

ネフルケカシュタのミニチュアカノポス壺は、壺の部分は破壊を受けていますが4点セットで見つかり、栓には「ホルスの息子たち」の四柱の精霊がついています。第3中間期は遺体から一旦取り出した内蔵を遺体に戻すことが慣習となっていたため、カノポス壺は実用的なものではなく、象徴的な役割を果たした副葬品と考えられます。大英博物館(The British Museum)では木製のミニチュアカノポス壺4点(EA 9562-9565)を所蔵しており、出土地は不明ですが年代としては第25王朝となっています。また、オランダのライデン国立古代博物館(The National Museum of Antiquities in Leiden)が所蔵する第3中間期の第23王朝(818-715 BCE)のタケロト3世(Takelot III)のものと考えられるカノポス壺3点(Leiden C.I.280, 283, 284)は、ミニチュアとなっていますが材質は不明です(白黒写真では石灰岩のように見えます)。残念ながら、どちらもネフルケカシュタのミニチュアカノポス壺とは形が違います。ネフルケカシュタのミニチュアカノポス壺は、形としてはアストンのカノポス壺の分類でいう Type IIIに近いと言えるかもしれません¹⁷。

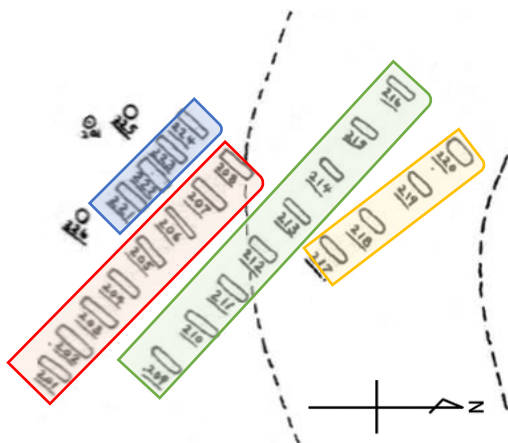
2. クッルの馬の埋葬について

クッルでは第25王朝のピアンキ、シャバタカ、シャバカ、タヌタマニの4人の王たちの馬の墓が王墓から140mほど北東に離れた場所に、約35m×35mの範囲に24基造られています。また、馬の墓の近くには犬の墓も2基造られています。馬を埋葬するという慣習はピアンキから始まったと考えられており、第25王朝のクシュ王たちの特徴の1つとされています(ヌリに新しい王墓地を造ったタハルカは除く)。ただ、馬の埋葬自体は第25王朝より前(おそらく第3中間期)のものがみつかり、(例えば、ヒラット・エル＝アラブ¹⁸ Hillat El-Arabや、近年ではトンボス¹⁹ Tombosなど)、クッルの場合は馬専用の墓を王が造っているため、他の地域の馬の埋葬とは意味が異なると思われる。

クッルの馬の墓は、南東から北西にかけて、王ごとに 1 列ずつ墓が配置されており、全部で 4 列構成となっています。王の名前を示す遺物が真ん中の 2 列 (Ku.201 の列がシャバカ、Ku.209 の列がシャバタカ) しか出ていないため、発掘調査報告書などでは王位順に南から、ピアンキの馬列 (Ku.221-224, 4 基)、シャバカの馬列 (Ku.201-208, 8 基)、シャバタカの馬列 (Ku.209-216, 8 基)、タヌタマニの馬列 (Ku.217-220, 4 基) とされてきました。しかし、近年、シャバカとシャバタカの王位の順番が入れ替わるという意見が支持されており、またシャバタカの馬の墓 (Ku.209 と Ku.210) からピアンキの古い即位名²⁰ (Throne name) が入ったファイアンス製のカルトゥーシュ (Cartouche) が見つかっていることから、ピアンキとタヌタマニの馬列が入れ替わる可能性が示されています²¹。その場合、ピアンキの馬列が Ku.217-220 に、そしてタヌタマニの馬列が Ku.221-224 となります。



図 12 シャバタカの馬の墓 (Ku.211) 出土の馬具
©Museum of Fine Arts Boston,
(Accession Number 21.10565)



- Ku.221-224 (新) タヌタマニの馬列
- Ku. 201- シャバカの馬列
- Ku.209- シャバタカの馬列
- Ku. 217-220 (新) ピアンキの馬列

図 13 クッルの馬の墓域拡大図
(Dunham 1950, Map 2 改編)

ツタンカーメン (Tutankhamen) の墓からは 6 台のチャリオット (戦車) が見つっていますが、クッルの墓からはチャリオットは見つかっていません。しかし、クッルに埋葬された馬はチャリオット用と考えられており、4 頭 1 組であったと考えられています²²。馬の墓の構造にはバリエーションが見られ、単純な長方形の土坑墓だけでなく、馬の胴部や頸部を支える構造になっている墓や、前足と後ろ足用に溝が掘られた墓などがあります。これらの墓では馬は首を北東に向け、立ったまま埋葬されたと考えられますが、馬の頭蓋骨は見つかっていません。

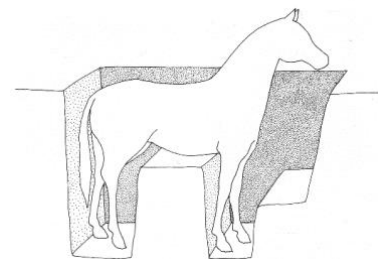


図 14 クッルの馬の埋葬例
(Kendall 1982, Fig. 30)

轡や頭部用馬具などの痕跡も見られないことから、埋葬する前に首を刎ねたのではないかという意見もありましたが、頭蓋骨の一部や歯が見つかった墓もあり、また出土遺物の位置が頭や首があったと思われる辺りに集中していることから、馬の頭部に飾られた装飾品を得るため、盗掘者によって後に頭部が切断されたと考えられています。

いつ頃からヌビアで馬が飼われるようになったのかは不明ですが、僅かな例としては中王国時代（New Kingdom 2055-1795 BCE）のブヘン（Buhen）や、新王国時代のサイ（Sai）とソレブ（Soleb）でも馬の骨が見つっています。ナイル川第3急湍から第4急湍に広がるドンゴラ・リーチ（Dongola Reach）は、中世以降、馬の繁殖が行われていたことから、研究者のハイドン（Lisa A. Heidorn）は第25王朝やそれ以前にこの地域が馬の繁殖地として重要であった可能性を示しています²³。また、第25王朝の時期のエジプトの最大の敵であるアッシリア帝国は、たびたびエジプトの馬を要求していたことがアッシリアの文書などから分かっています。アッシリアのティグラト・ピレセル3世（Tiglath Pileser III, 745-727 BC）が地中海沿岸の町を制圧した後に戦利品としてエジプトの馬を要求したという記録や、下エジプトのデルタ地域の諸王の1人（第22王朝の最後の王とされる）オソルコン4世（Osorkon IV, 730-715 BC）がアッシリアのサルゴン2世（Sargon II, 722-705 BC）にエジプトの馬を贈ったという記録などをはじめ、その後もセンナケリブ（Sennacherib, 704-681 BC）、エサルハドン（Esarhaddon, 680-669 BC）、アッシュルバニパル（Ashurbanipal, 668-627 BC）など、歴代のアッシリア王がエジプトの馬を求めていたことが知られています。このアッシリアが求めたエジプトの馬というのは、クシュの馬であったということが、文書や図像の解釈から示されています²⁴。

アッシリアからそれほど求められていたクシュの馬とはどのような馬だったのか、と思われる方もいるかと思いますが。2019年にシャバタカの馬の墓 Ku.209 と Ku.210 から見つかった骨の再鑑定が行われ、Ku.209のほうは体高が149.15cm²⁵、Ku.210のほうは154.09cmのどちらも成馬と報告されています。1990年代にも Ku.211 と Ku.212 の骨の鑑定が行われており、Ku.211 が体高152.29cm、Ku.212 が153.33cm、どちらも成馬で Ku.212 より Ku.211 のほうが年齢が高く、1頭はスタリオン（種牡馬）で、もう1頭もおそらく牡馬であることが示されています。Ku.209 と Ku.210 は性別の決め手となる骨がないため、Ku.211 と Ku.212 との比較から、どちらも種牡馬だった可能性が示されています²⁶。

クシュ王ピアンキが彼の治世21年（紀元前730年頃か²⁷）に下エジプトのデルタの諸王たちを制圧したという通称「戦勝碑（JE48862）」（Great Triumphal Stela もしくは Victory Stela）（図15）の上段には、ピアンキの向かい側に馬が描かれ、反抗するヘルモポリス（Hermopolis）の支配者を制圧するために包囲攻撃を行い、その攻撃中に支配者が自分の馬に餌をやらず馬が飢えたことを知ってピアンキが憤慨し、馬を飢えさせたことに対して悲しんだ、というピアンキと馬に関するエピソードが記されています。



図15 ピアンキの戦勝碑

Ancient Nubia: African Kingdoms on the Nile
(The American University in Cairo Press, 2012),
p.217, Fig153

おそらくこれがクシュと馬を結びつけるものとして最初に確認できる例であると考えられていますが、ピアンキはジェベル・バルカルのアメン神殿の壁画にも馬を描くなどしており、クシュ王たちが「馬を大切にしていた」と考えられ、その結果、自分たちの墓のそばに馬を埋葬した、と考えられているのは、このピアンキのエピソードや壁画によるものと思われる。

タハルカは自分の墓のそばに馬を埋葬することはありませんでしたが、タハルカが建立したカワ（Kawa）のアメン神殿の壁画には、タハルカが馬に乗っている姿が描かれていることから、他のクシュ王たちと同様に馬を大切にしていたと思われます。第 25 王朝の王の中でタハルカだけが馬の墓を造っていない理由としては、ナイル川西岸のヌリに新しい王墓地を造営し、カノポス壺やシャブティなど副葬品においてもエジプトの埋葬慣習を忠実に再現しようとしたことが窺えることから、ピアンキが始めた馬の埋葬がエジプトの埋葬慣習では見られない独自のものであったため、タハルカは馬の墓を造らなかったのではないかと考えられます。



図 16 Ku.201 出土のビーズネット（左）と Ku.211 出土のネックレス（中央、右）

©Museum of Fine Arts Boston, (Accession Number 21.10560, 19.2876, 21.10567)

クッルで埋葬された馬はビーズネット（図 16）が掛けられ、ウジャトの眼やコヤス貝でできたネックレス（図 15 中央）や、王のカルトウーシュでできた馬具（図 12）、ハトホル女神のアミュレットでできたネックレスなどさまざまな装身具が首から下げられ、手厚く埋葬されていたことが出土遺物から確認できます。これらの馬は生前、王のチャリオットを引くための馬であったと考えられており²⁸、一般的には王の死に伴った犠牲獣として埋葬が行われたとされています。来世へ同行させる馬は飾り立てられて墓に埋葬されていますが、現世での彼らの役割と関係する「チャリオット」は王墓や馬の墓からは見つかりません。クシュは軍事力によってエジプトを統一することができたと考えられており、そこで大きな役割を果たしたものとして馬が挙げられ、馬と強力な軍事力ということからチャリオットの存在が取り上げられています。しかし、ピアンキの戦勝碑や神殿などの壁画に描かれるクシュの馬はいつも人間に引かれた姿であり、エジプトやアッシリアで見られるようなチャリオットに乗って敵を制圧するような勇ましい王とそのチャリオットを曳く馬というような場面は確認できません。このようにクシュとチャリオットを結びつける明確な証拠はありませんが、Ku.209 の馬は脊椎症や前肢の変形性関節症であったことが報告

されており、騎乗やチャリオットの牽引などがこれらの病気を引き起こした可能性が指摘されています²⁹。

ヌビアでは中期ケルマ（Middle Kerma, 2050-1750 BCE）から羊など動物の犠牲が多く見られるようになり、生きたまま被葬者の墓に埋められるようになります³⁰。しかし、クッルの馬はクシュ王たちの墓と一緒に埋葬されておらず、また王の墓のすぐ脇に埋められてもいません。少なくともピアンキの戦勝碑のエピソードからは、馬に対する慈愛を感じることができ、自分たちの死に際して愛馬を故意に殺して埋葬するという行為には結びつかないように思われます。クッルの馬の埋葬は一般的に言われているような王の死に伴って殺された犠牲獣の墓ではなく、クシュ王たちの愛馬が亡くなった際の馬の墓地であったのではないのでしょうか。それは馬の墓に近接して犬の墓が 2 基ほど造られていることから、これらが犠牲獣の墓ではないということの証明になるのではないかと筆者は考えます。

3. まとめ

今回は王墓地クッルの第 25 王朝に関連する人々の墓から見つかった副葬品の一部と、馬の埋葬について紹介いたしました。クッルは興味深い副葬品が色々あるのですが、画像がないものも多く、また出土品について文献などで調べるのにも時間が掛かり、なかなか全てを紹介することができない状況です。馬の埋葬についても、まだまだ不明なことが多くあり、本来であればヌビアで見ついている他地域の馬の埋葬について、もっと詳しく説明しなければいけないのですが、今回はメロエ南遺跡の馬の墓についても省かせていただきました（人の墓のそばに 1 頭だけ埋葬されているものです）。

「スーダン遺跡紹介」は、自分が訪ねた遺跡を紹介するため、もう少し簡単に執筆ができるのではないかと考えていたのですが、毎回、調べることが多く、締め切りに間に合わないことが多々あります。調べる中で色々な発見があり、私にとっては非常に勉強になるため、今後も遺跡紹介を続けて行く予定ですが、不定期掲載となりますことをご了承ください。少しでも皆さんがクシュ王国の魅力を知っていただけるよう努力したいと思います。

参考文献

- Aston, David A.** 2009, *Burial Assemblages of Dynasty 21-25: Chronology, Typology, Developments*, (Denkschriften der Gesamtakademie Bd. 56), Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Dodson, Aidan** 1994, *The Canopic Equipment of the Kings of Egypt*. Kegan Paul International, (Digital printing version, 2009, London and New York, Routledge).
- Dunham, Dows** 1950, *El-Kurru*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.1), Boston, Harvard University Press.
- Dunham, Dows** 1955, *Nuri*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.2), Boston, The Museum of Fine Arts Boston.
- Heidorn, Lisa A.** 1997, “The Horses of Kush”, *Journal of Near Eastern Studies* 56(2), 105-114.

Kendall, Timothy 1982, *Kush: Lost Kingdom of the Nile*, Massachusetts, Brockton Art Museum/Fuller Memorial Brockton.

Näser, Claudia and Giulia Mazzetti 2020, “Of kings and horses: Two new horse skeletons from the royal cemetery at el-Kurru, Sudan”, *Archaeology International* 23(1), 122-137.

Schrader, Sarah A. et al. 2018, “Symbolic equids and Kushite state formation: A horse burial at Tombos”, *Antiquity* 92(362), 383-397.

Török, László 1997, *The Kingdom of Kush : Handbook of the Napatan-Meroitic Civilization*, Leiden.

イアン・ショー & ポール・ニコルソン, 『大英博物館古代エジプト百科事典』内田杉彦(訳), 原書房, 1997年。

坂本翼, 「王家埋葬地から見たクシュの歴史的諸問題」 『西アジア考古学会』 19号, 2018年, 47-56頁。

和田浩一郎, 『古代エジプトの埋葬習慣』, ポプラ社, 2014年

¹ アラビア語の地名や遺跡名、冠詞については、英語で書かれた発掘調査報告書や研究論文を参考にしているため、実際のアラビア語の発音と一致していないことも多く、また文献によって表記が違っていることもあります。「Jebel Barkal」と「Gebel Barkal」、「El Kurru」と「Al Kurru」など。

² 第25王朝の編年に関しては、誰を最初の王とするか、また王の治世年をどのように計算するのか、ということが研究者間で異なり、文献によって編年は様々です。今回は前回の表1で示した王の治世年を基に、近年支持されている王位の順番、シャバタカ、シャバカ、タハルカ、タヌタマニの4人の王の治世年を第25王朝としています。

³ 遺体の一部が見つかっているのは Ku.Tum.1、Ku.10、Ku.52、Ku.54 です。また Ku.16、Ku.18、Ku.51からは、これらの墓の被葬者とは関係のないメロエ期の遺体が見つかっています。

⁴ 近年のエジプト展では、CT スキャンなどの技術を用いて、非破壊でミイラの内部を確認する取り組みが紹介されており、ミイラの包帯の間から出現するアミュレットを映像や画像などで見るができます。最近では「大英博物館ミイラ展：古代エジプト6つの物語」(2021年～2022年)や「ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展」(2020年～2022年)など。

⁵ 発掘調査報告書では単に「Queen or Princess」などと記載され、ピアンキの王妃となっていない墓もありますが、ここでは未発表資料などを基に研究を重ねた研究者のケンダル (Timothy Kendall) が示した表 (Kendall 1999, p.97.) の情報を基にしています。ケンダルの表では Ku.22 (ペケレスロ Pekereslo)、Ku.55、Ku.54、Ku.52 (ネフルケカシュタ)、Ku.51、Ku.53 (タビリィ)、Ku.4 (ケンサ) がピアンキの王妃の墓となっています。このうち Ku.22 については、ケンダルは「セノタフ cenotaph」(遺体が埋葬されない空の墓) だった可能性を示しています (Kendall 1999, pp.42-43.)。

⁶ 四柱の擬人化された精霊たち自身も、4つの方位を受けもつ四柱の守護女神に守られていたとされ、人頭のイムセティは南と結びつくイシス女神、ヒヒ頭のハビは北と結びつくネフティス女神、ジャッカル頭のドゥアムテフは東と結びつくネイト女神、そしてハヤブサ頭のケベフセヌエフは西と結びつくセルケト女神となっています (ショー 1997, p.121)

⁷ 一般的に良く知られたものとしては、ツタンカーメン王の墓から見つかったカノボス壺の栓が挙げられます。方解岩製の4つのカノボス壺の上部には、それぞれネメス頭巾を身に着けたエジプト王の頭部(胸のところまで) が表された栓がついています。

⁸ Aston 2009, p.299.

⁹ 少々分かりにくいのですが第25王朝と第26王朝は重なっている年代があります。研究者によって第26王朝の開始年代は異なりますが、第25王朝の時期のエジプトの敵はアッシリア帝国であり、第25王朝のクシュ王たちは最終的にアッシリア帝国に負け、エジプト王として即位したばかりのタヌタマニはヌビアに戻らざるを得なかった、という事情があります。第26王朝はアッシリア帝国から権力を譲り受けたデルタの王が始めた王朝となります。

¹⁰ Dodson 1994, p.98.

¹¹ アストンは第3中間期に属するエジプトの墓から出土したカノボス壺を Type I～V に分類しています (Aston 2009, pp.293-299.)。主にエジプトで見つかったものを対象としているため、シャバタカのカノボス壺の分析はありませんが、おそらく Type V に当てはまると考えられます。

¹² Dodson 1994, pp.141-142, 182-183.

¹³ Aston 2009, p.299.

¹⁴ ボストン美術館のホームページから所蔵品の検索をすると、Ku.52 出土のミニチュアのカノボス壺は「Ku.55 出土」と間違えて記載されています（ミニチュアという表記もなし）。ボストン美術館は、たまにデータが間違っていることがあり、クッル出土がヌリ出土となっている遺物もあります。ちなみにミニチュアのカノボス壺は、1994 年から National Center of Afro-American Artists に貸出中のようです。

¹⁵ Ku.3 と Ku.4 はピアンキなど第 25 王朝の王たちの墓のすぐ南側の主要な王妃の墓のエリアにあります。Ku.52 は第 25 王朝の王たちの墓から 200m ほど北に離れた、ピアンキのマイナーな王妃の墓のエリアにあります。

¹⁶ 主要な王妃の墓のエリアでは、下降階段のみアクセス可能な横穴式の岩窟墓となっていますが、Ku.52 のあるピアンキのマイナーな王妃の墓のエリアでは、堅穴式でピアンキの墓で用いられた持ち送り積みのヴォールト天井を持つ墓となっています（下降階段なし）。

¹⁷ Type III は丸みを帯びたカノボス壺で、類例は少ないとのこと（Aston 2009, pp.295-299.）。

¹⁸ ヒラット・エル＝アラブはジェベル・バルカルから南へ 3 km ほどの場所にある新王国時代～第 25 王朝の墓地遺跡です。1992 年～2000 年に本格的に発掘され、19 基の墓が見つっています。ヌビアは通常、単葬墓ですが、ヒラット・エル＝アラブの墓は全て合葬墓となっており、おそらくエジプトの支配下にあった新王国時代に造られた墓に長期間、追葬されたものと考えられます。

¹⁹ トンボスはナイル川第 3 急湍の遺跡で、新王国時代のエジプトの植民地です。ただし、エジプトの中央集権制が崩壊した後も、人々がトンボスに住み続けていたことが墓の調査などから分かっており、2011 年に見つかったトンボスの馬の墓も、元々は新王国時代に建てられたトゥーム・チャペル（Tomb-Chapel）と呼ばれる小さなピラミッドがついた礼拝施設付きの墓を再利用したものだそうです。馬の墓は地下の埋葬室に通じるシャフト（地上から 1.65m のところ）から見つかり、地上から 6m 下の埋葬室には新王国時代から第 3 中間期まで数世代分の人々の遺体があったとのこと。年代測定の結果、馬の墓は第 3 中間期の初期と判明しています。また埋葬された馬はおそらく牝馬で年齢は 12 歳～15 歳くらいであったことも示されています（Schrader et al. 2018, pp.388,391.）。

²⁰ Ku.209 で見つかったカルトゥーシュの形をしたネックレスは、シャバカの即位名「Djed-ka-ra」の他に「Men-kheper-ra」という即位名があります。また Ku.210 からは「Men-kheper-ra」という即位名が見つかり、発掘調査報告書ではどちらもシャバカの即位名としています。しかし、「Men-kheper-ra」はピアンキの初期の即位名であったことが多くの研究者によって示されています（Näser and Mazzetti 2020, p.134.）。

²¹ Näser and Mazzetti 2020, pp.134-135.

²² Kendall 1982, p.32.

²³ Heidorn 1997, p.105.

²⁴ Heidorn 1997, p.107.

²⁵ Ku.209 はヒラット・エル＝アラブの馬（149cm ほど）と同じくらいの大きさ。

²⁶ Näser and Mazzetti 2020, pp.127-128,131-134.

²⁷ このクシュ王ピアンキの戦勝碑は、上下エジプトを統一し、第 25 王朝の基礎となった出来事であり、非常に重要ではあるが、年代ははっきりしない。今回は Hans Goedicke の年代を使用した。年代については研究者間で異なると思われる。Goedicke 1998, p. 6.

²⁸ Heidorn 1997, p.106.

²⁹ Näser and Mazzetti 2020, p.132.

³⁰ 古典期ケルマ（Classic Kerma, 1750-1500 BCE）の時期には、動物だけでなく、王と考えられる人物の巨大な墳丘墓で殉葬が確認されています。KX という王墓では被葬者のほか、子どもを含む王の家族や剣を持った家臣など 322 体の殉葬が見られます。ヌビアでも殉葬は特殊であり、この時期に突然起こった慣習です。